●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 14-1

子どもと人間関係

目　次

人間関係の希薄な成長のスタイル …… 深谷昌志 …… 2

〔調査レポート〕子どもと人間関係 …… 7

要約 …… 8
はじめに …… 12
1．調査の概要 …… 13
●調査方法 …… 13
●サンプル校 …… 13
●子どもたちの属性 …… 15
2．子どもの周囲にいる人々 …… 17
●身内・準身内・親しい他人 …… 17
3．家族の中で …… 19
●父親とのかかわり …… 19
●母親とのかかわり …… 21
●きょうだいとのかかわり …… 23
●同居の祖父母とのかかわり …… 24
●家族のまとまり …… 26
4．家族の外で …… 27
●親戚とのかかわり …… 27
●近隣の人々とのかかわり …… 30
●友人とのかかわり …… 31
5．子どもの住む心理的な世界 …… 33
●人間関係を作り出す力をめぐって …… 33
●子どもたちのとらえている人間的環境 …… 35
●子どもたちの人間観 …… 37
6．地域差について …… 38
7．男子と女子の特徴 …… 41
●親との関係 …… 41
●きょうだいや家族との関係 …… 44
●友人との関係 …… 46
●人間関係の性差 …… 47
8．祖父母の同居と家族のきずな …… 49
●二世代家族と三世代家族で …… 49
●地位の下降している祖父母 …… 52
9．父親の職業による影響 …… 53
10．フルタイムと専業主婦の母親 …… 55
●親子関係 …… 55
●きょうだいや友人との関係 …… 58
●母親が働くと …… 61
まとめ …… 62

〔対談〕カウンセラーからみた現代子ども像 …… 河野良和 vs 深谷昌志 …… 63

・文献紹介『いま子供は－親と教師の子供学－』 …… 72

資料1　調査票見本 …… 75
資料2　基礎集計表 …… 85

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

人間関係の希薄な成長のスタイル

静岡大学教授
深谷昌志

友の中で育つ

子どもたちの人間関係は極限状況といえるくらいに希薄化している。そうした問題意識で本号の調査テーマが設定されたのだが、考えてみると、子どもたちは、家庭、地域、学校の中で育ってくる。

そして、かつての社会なら家族といっても祖父母が同居し、きょうだいの数が多い。それに親類や使用人など、多様な人々から家族が構成されているのが常であった。

それに対し現在では、核家族化が進んだだけでなく、きょうだいの数もへった。そのため父と母、そしてきょうだい1人というのが家庭内の平均的な人間関係となる。

また、学校の中の人間関係も、かつてと比べるとあたたかみがへり、表面的になったような印象を受ける。

そうした家庭や学校以上に、子どもに影響を及ぼしたのは、地域の中での友だちとのつきあいであった。

長い間、子どもたちは、友だちの中で成長すると信じられてきた。事実、かつての子どもについていえば、子どもたちはその年齢に応じて、友だちの範囲を拡大しながら成人していくのが通例であった。

大づかみにすると、かつての友だち関係は①ままごと遊び仲間、②ギャング集団、③若衆組や青年団のような3層から構成されていた。まず、家のまわりに何人かの子が集まりままごと遊びをするのが、友だち関係の出発点になる。もちろん、ままごと遊び集団は男女混合で、出入りの自由な、集団内の構造が流動的なグループで、集団というより、ふれあい仲間という感じが強い。そうしたグループに、3歳ぐらいから仲間入りをする。

しかし小学生になると、ままごと遊び集団を卒業して、子どもたちはギャング集団へ帰属する。といっても、低学年の子たちは、いわゆる「ミソッカス」で、先輩たちのまねをして、ついて歩く形をとる。

ギャング集団は、子どもたちの群れをなして遊ぶさまがギャングを連想させることから命名されたという。念のために、ギャング集団の特性を列挙しておくと、①同じ地域に住

む、②7～8人から10数人の、③同性で、④異年齢の子どもから構成される、⑤遊び仲間集団で、⑥その集団なりの文化を持ち、⑦集団内の役割の分化した、⑧子どもの自治組織、などとなる。

これらの特性のうち、重要なのは「その集団なりの文化を持つ」（⑥）点で、集団のメンバーは、暗号や秘密のかくれ家などを共有していた。そのほか、メンコやビー玉、チャンバラごっこなどの遊び方についても、その集団なりのルールが工夫されていた。

所属集団をかえつつ

考えてみると、子どもたちは出生以来、親のもとで生活を送り、その後、幼稚園や小学校で教師からの指導を受けて育ってくる。換言するなら、おとなに依存しつつ、おとなたちの価値観を受容する過程である。もちろん生理的な未熟児として生まれるヒトの子の場合、ある程度の期間、受容の生活を送らざるを得ないし、特に現代のように一人前になるために多くの知識や技術の習得を求められる時代を迎えると、受容期間の延長は避けられまい。

もともと社会化とは、そうした受容を基本とした過程であろうが、その中にあって、ギャング集団はおとなの眼から隔離されているだけあって、受容の比率が低く、子どもたち自身が自発性を発揮できる数少ない機会に属する。

そうしたギャング集団に所属し、男の子たちは群れをなして、メンコやビー玉に興じ、女の子たちはなわとびやおはじきをする。考えてみると、子どもの時代の楽しい思い出の大半が、そうした友とのふれあいから成り立っているように思う。

しかし小学校を卒業すると、子どもたちはギャング集団を離れて、昔なら若衆組や娘組、明治末期ぐらいからは青年団や処女会に入る。村で生活をしていくのに必要な農作業の知識や入会地のルールなどを学んでいく機会である。もちろん、娘組の場合は、裁縫や料理などの習得が主要な課題であった。

このように、かつての子どもたちは、家のすぐまわりの「ままごと遊び仲間」から、町内や字（あざ）などを単位とする「ギャング集団」、そして村や町を基盤にした「若衆組」と、年齢に応じて所属集団をかえながら成長していったのである。そうした意味では、幼稚園、小・中学校という学校段階に対応した形で、子どもたちは3つの仲間集団を持っていたともいえよう。

しかし、若衆組はともかくとしても、青年団も昭和30年代前半には姿を消した。そしてこの10年来、子どもの世界からギャング集団も消滅し始めている。

群れ遊びをしない子どもたち

子どもを対象とした調査を開始した頃、都市はともかく、山村へ行けば、元気に遊んでいる子どもの姿が見られるのではと思い、サンショウウオでも探すような意気ごみで山奥を目指した時期があった。しかし、調査を何回重ねても得られる結果はいつも同じで、子どもたちは家の中にこもって夕方までの一刻を過ごしていた。

山村の場合は、過疎化が引き金となって、そして都市では、遊び場の喪失に、交通事情の悪化や塾やけいこごと通いなどが加わった形で、ギャング集団の消滅状況が進んでいる。もちろん、地域によって、高速道路が校区を分断して、あるいは人工ダムができてなど、主たる要因はさまざまだが、いずれにせよ、全国レベルでみると、複合汚染のようにいくつかの要因が相乗作用をして、今やギャング集団は郷愁の世界にしか姿をとどめていない状況を迎えている。

ギャング集団を失った子どもたちは、家の中でテレビを見たり、マンガを読んだりして毎日を送っているが、そうした中で、屋外へ出ていくのはけいこごとや学習塾へ通うときであろう。

学習塾かけいこごとかはともあれ、誰かがどこかへ通っている。そして、自分が暇なときは誰かが忙しい。あるいは、誰かが帰宅すると、今度は自分が多忙になるという感じで、スケジュールのいれちがいが生ずる。そうなってしまうと、友だちと遊びたいと思っていても、友を見つけることができないので、結局1人で家の中にいる形になりやすい。

しかも学習塾はともあれ、けいこごとは小学校低学年でもやっているから、そうした生活が幼い頃からずっと続いていく。そうなると、友を持たない暮らしがあたり前になり始める。どう考えても、いるかいないかあてにならない友を求めるより、テレビを見ていた方がましだという気持ちになる。そうなると、自然とのふれあいに欠けるだけでなく、友との交流も乏しく、家の中でテレビかマンガを見るという遊びのスタイルが定着する。それが、すでにふれたような「群れ」から「孤立」への遊びの変化をもたらすのであろう。

発達心理学のテキストなどによれば、ギャング集団への帰属は児童期の後半を特性づけるものといわれる。ところが、これまで述べてきたように、日本の子どもたちはギャング集団を持っていない。だとすると、これまでの学説が誤っていたか、それとも日本の子どもの成長が歪みを持ち始めたかのいずれかになる。

ここ数年、年に何回か海外を訪れ、子どもたちの生活ぶりを探る調査を行ってきている。韓国へ行くと、子どもたちが路上で紙メンや石けりをしていたし、マニラの子どもは、上半身はだかになって鬼ごっこをしていた。そして、シアトルやサンフランシスコ郊外でも、ボール投げやローラースケートをしている子どもの姿があった。さらに、パリの路地裏へ入ると、なにやら悪さをしている子どもたちの群れがあった。

こうしたことは調査をするまでもなく、それぞれの国へ行き、市場や広場を歩けば、見るつもりはなくとも目にとまる光景である。したがって、少なくとも日本以外の国では、程度の差こそあれ、子どもたちのギャング集団は生き続けている。そうだとすると、日本の子どもだけがギャング集団を持たずに成長している計算になる。ということは、子どもたちが人間関係らしい関係を友との間に持てないことになる。

友を持たない成長のスタイル

いずれにせよ、ギャング集団はすでに崩れ去り、現在の子どもたちは、遊びを持てないだけでなく友を持つことも少ない。したがって、子どもたちの多くは友という言葉に「クラスの仲よしの子」を連想する。いうまでもなく、学級は人為的に作られた集団であるうえに、在校時間だけのふれあいにすぎない。そのうえ、学級の多くの時間は授業に費やされるから、友としての接触は休み時間か、授業の始まる前か後に限られてくる。しかしすでにふれたように、ギャング集団を持たない現在の子どもにとって、クラスメートとのつきあいが、友とふれあう唯一の場となりつつある。しかも、同一学年でもクラスが違うと、そして同じ組でも性が異なると、さらに同性でも気が合わないと、話をかわす割合が少なくなる。もちろん、学級がかわると、去る者は日々にうとしと、仲のよい友との縁も切れる。

こうした子どもたちの友だちづきあいの姿は、おとなたちが会社の同僚と、とりあえず表面上にこやかにつきあうのに似ている。全人的につきあうのでなく、時間を共有している間、心の奥底をかくしつつ表向きをつくろう形である。こうした状況では、友を信ずる心など生じてきそうにない。

事実、この数年、友を求めようともせず、孤独に慣れた子どもが増加している。もちろん、こうした子とて寂しさを感じることもあろう。そうしたときはマンガ雑誌のページをめくるか、テレビのスイッチをつけ、お笑い番組でも見ればよいのである。とりあえずマンガやテレビが、心の傷をいやしてくれるか

らである。

さらにテレビゲームの開発は、子どもたちの友だち不在に拍車をかけたような印象を受ける。つまりテレビやマンガにあきた子どもたちが、今度はテレビゲームにチャレンジをする。困ったことにテレビゲームは裏わざを研究していたりすると、あっという間に何時間か過ぎる。そうなると、子どもたちはなおのこと、友だちを持たない状況に慣れ、寂しさを感じなくなる。

マンガやテレビゲーム、そしてビデオ、CDなどに子どもたちは心のやすらぎの場を見いだしているのである。そうした意味では、テレビやマンガやラジオは、子どもたちにとっての友なのかもしれない。孤独な子どもたちが、マスメディアの中に、心の友を求めようとしている。身近な世界に人間的な絆を見いだせず、人工的なマスメディアの世界に人工的な友を求める。アメリカの社会学者・リースマンのいう「孤独な群衆」という言葉が、実在感を持って迫ってくるのを感じる。しかも、リースマンの描いたのは、おとなの世界であったのに、子どもの世界にそうした傾向が及んでいる。

この10年来、いじめや高校中退、そして不登校などのように、これまでの基準ではわかりにくい逸脱行為が増加している。そうした出来事の中に、子どもたちの耐性のなさを感じることが多い。マスメディアとのふれあいに心のやすらぎを求めていた子どもが極限状況に達して、カタストロフィー状況（破局）を迎える。しかし彼らは、友とのつきあいを持たないので、はけ口の求め方を知らず、ある面では幼稚な、そして時には、おとな顔まけの行為へ走る。そう考えてくると、逸脱行動へ走りがちな子どもも、友を持たずに育つという人間関係の希薄な環境の生んだ被害者ともいえなくもない。

そうした意味では、平凡なことながら、友を持つことの大事さを痛感する。放課後、家へ帰って友だちと遊ぶ一刻を持つ。そうした願いは決して無理なものでもあるまい。しかし、子どもたちがそうした自然の中での成長スタイルを持てなくなって、すでに20年が過ぎ、ギャング集団を失った子の１期生は大学を巣立っている。そうした意味で、歪みを伴った成長がどういう結果をもたらすか、その具体例が若者たちの変容の形であらわれてくる可能性が強い。しかし、子どもたちがギャング集団を持てるようになれば、そうした病理のかなりが解消されるように思われてならない。

〔調査レポート〕

子どもと人間関係

文教大学女子短期大学部助教授　石川洋子
東京学芸大学助教授　田村　毅
日本心理センター研究委員　山根はるみ
江戸川区教育研究所教育相談員　中原美恵
東京学芸大学教授　深谷和子

調査レポート

子どもと人間関係

要　約

調査概要

1．**調査主題**　子どもと人間関係
2．**調査視点**　人間関係上の問題点が指摘されている現代の子どもたちが本当にそうなのかを探り、子どもたちの人間関係や人間観を明らかにすることを目的とした。
3．**調査項目**　ケガをしたらどのくらい心配してくれるか、父親・母親・きょうだい・同居の祖父母・親戚・友人・近隣の人々とのかかわり、家族のまとまり、親戚づき合い、人間観、など。
4．**調査時期**　1993年6月
5．**調査対象**　全国35校に通う小学6年生
6．**調査方法**　学校通しによる質問紙調査
7．**サンプル数**　全国約2万5千の小学校の50分の1にあたる500校を無作為に抽出して調査依頼し、回答のあった35校の小学6年生3,098名（有効回答数2,993名）。

（人）

学年／性	男　子	女　子	合　計
6年	1,552	1,441	2,993

1．人間関係上の問題点が指摘されている現代の子どもたちが、本当にそうなのかを、小さい全国調査で探ってみるのが、このレポートの目的である。全国に散らばる35校の小学校の6年生を対象にしている。家族サイズは4人が36%、5人が27%、また祖父との同居率は23%、祖母とは33%で、関東を中心に行われてきたこれまでの『小学生ナウ』の数値より若干高い。（図1、表3）

2．子どもの心理的距離から分類すると、子どもの人間関係は3種類に大別される。「あなたがケガをしたとき心配してくれる人は」の問いを用いてみると、①身内＝母親＞祖父母＞父親の順に、自分を心配してくれる人という評価がある。②準身内＝一番仲よしの友だち＞親戚のおじ・おば＞担任の先生＞きょうだい＞いとこ、③他人＝養護教諭＞校長先生＞近所の人たちがそれであり、いとことの疎遠ぶり、近所の人たちとの薄い関係が特徴的である。（表4）

3．家族とのかかわりをみると、父親と行動を共にすることは少ないが、自分のことを知っていてくれるとする安心感は持っているようである。また母親は、行動のレベルでも内的なレベルでも、かかわりが深く、ある種の一体感が見いだされる。（図４、図５）

4．きょうだいとの関係は、予想よりはるかに遠いもののようである。出生率1.50時代では、半分は年下の幼いきょうだいということになるが、それにしても「一番身近にいる親友」という関係はみられない。（図７）

5．祖父母と同居していても、子どもと祖父母との心理的距離はかなり遠いもののようである。「同居の中の孤独」という語が思い起こされる。（図８）

6．子どもの目からみての家族のまとまりは、非常に強いというほどのものではないようだ。それが揺らぎつつある現代家族の姿なのか、それとも自立していく子どもたちのややクールな眼差しなのかは、判断がむずかしいところだろう。（図10）

調査レポート

子どもと人間関係

要約

7．親戚とのかかわりは、かなり薄いものになってきている。子どもは親戚のことをよく知らないし、親のレベルでの交流も少ないようである。（図15）

8．近隣との関係では、やや親しい家を１軒または２、３軒持っているが、子どもに養育的な親戚同然のつき合いは、１軒もないと答えた者が７割に達する。（図16）

9．友人関係は楽しいと答える者が多いが、しかし「イヤと言えない、リーダーにはさからわない」という対立やトラブルを避ける傾向がみられる。（表６）

10．人間関係の性差をみると、家族や親しい友人との関係では、すべての側面で男子より女子の方が人間関係をうまく保っている。しかし男子の方が、家庭外に目を向けた自立的な友人関係を展開しているかのような姿がみられる。（表15、表16）

11. 祖父母と同居しているかどうかで親子の関係は影響を受けない。祖父母が同居していると親戚づき合いはより行われるが、家族そろって楽しんだり、他の家族とつき合うことなどは、ややできにくくなるかのようである。（表17、表18、表19、表20）

12. 専業主婦の家庭では、母親と子どものかかわりが濃くなり、家族のまとまりも強くなる。しかし働く母親の子どもは、きょうだいとのかかわりがやや深く、友人とのかかわりがより密接で、人間関係がより上手である。（図24、図25）

働く母親については、その子どもへの影響を案ずる声も依然としてあるが、今回フルタイムで働く母親の子どもは、従来なら得られていたであろう母親からの精神的充足感を、きょうだいや友人関係の中で、ある程度得ることに成功している姿が浮かび上がった。時代と共に変わりゆく生活環境やライフスタイルに合わせて好ましい人間関係をしなやかに求めていく能力を、子どもたちは持ち合わせているかに思われる。

はじめに

子どもがさまざまな面で変わったと指摘されて久しい。その中でもおとなたちがもっとも憂慮しているのは、子どもたちの人間関係の希薄化である。

友人たちと深くつき合うことで、傷つけ傷つけられることを避けようとする傾向が一般化しているとか、人間関係の修復に自信がないので、人と対立することを避けようとする傾向などを指摘する人々も多い。成長過程の中で、楽しいことや面白いことだけでなく、人々との暮らしにつきものの、辛さ、汚さ、悔しさなどの体験の中で、子どもの心のひだの数と深さが増し、心が成長していくことを考えると、こうした指摘は、はなはだ気がかりである。現代の子どもたちの、人間関係の中に何が生まれているのだろうか。

今回のレポートはそうした疑問に応えるべく、現代の子どもたちの人間関係や人間観を明らかにする目的で行われた。

1 調査の概要

●調査方法)))

調査の方法は、全国約２万５千の小学校の50分の１にあたる500校を無作為に抽出し、調査を依頼した。小さいながら、一種の全国調査である。調査の対象は、各学校の６年生（１組）であった。その結果、**表１**にあるように全国35校の調査協力を得た。対象は、小学６年生3,098名（有効回答数2,993名）、男子52%、女子48%である。調査時期は1993年６月で、すべて学校通しの質問紙調査で行われた。

●サンプル校)))

調査地は全国にわたっているが、その地域の特性を知るために、協力を得た学校の教頭あるいは教務主任に、その学区の様子などを聞いてみた。

表２は、その結果から得られた学区の地域の特性である。「古くからの住宅地」がほとんどを占める地域が35%、「新興住宅地」であるのは26%であり、「農業地域」の数値を加え、大きく３つの地域に分けられるようである。

表１　各地方ごとの調査サンプル

地　方	調査校数
北海道地方	２校
東北地方	６校
関東地方	９校
中部地方	５校
近畿地方	１校
中国地方	５校
四国地方	２校
九州地方	５校
合　　計	35校

表２　学区の地域性

（%）

	ほとんどの地域がそう	そういう地域も含まれる	ほとんどない	１つ代表させるならば
① 古くからの住宅地	34.6	52.5	12.9	29.3
② 新興住宅地	25.7	54.1	20.2	37.7
③ 農業地域	17.4	48.7	33.9	19.7
④ 商業地域	3.8	55.5	40.7	3.4
⑤ 団　地	2.2	70.5	27.3	2.0
⑥ 工業地域	－	29.7	70.3	6.1
⑦ オフィス街	－	27.2	72.8	1.8
⑧ 漁業地域	－	4.0	96.0	－

●子どもたちの属性)))

調査対象の子どもたちの属性は、**図1**、**表3**のとおりである。4人家族の者が一番多く36%、次いで5人家族の27%、祖父や祖母と同居する者は、それぞれ23%、33%であり、全国調査の特性が表れた数値となっている。

父親の職業は、会社員・公務員が最も多く65%。子どもの目から見て「一日働いている」という母親（フルタイム勤務者）は36%となっており、約30%を占める専業主婦よりも高くなっている（**図2**、**図3**）。

図1　家族の人数

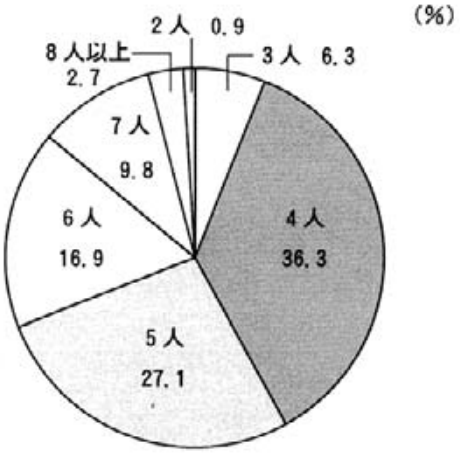


表3　同居者（複数回答）

家族	父親	母親	祖父	祖母	兄姉	弟妹	おじ・おば	いとこ	その他
%	93.4	98.0	23.4	32.8	54.6	51.9	1.5	0.6	1.6

図２　父親の職業

（%）

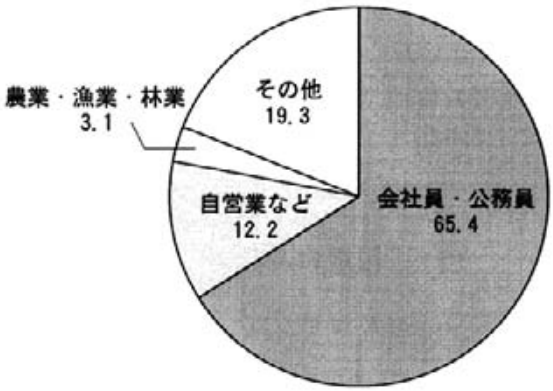
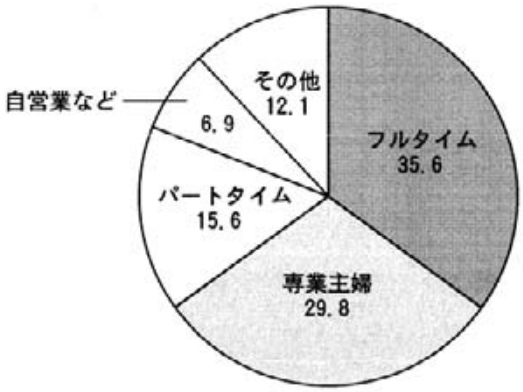


図３　母親の職業

（%）



2 子どもの周囲にいる人々

●身内・準身内・親しい他人)))

日常生活の中で、周囲に自分のことを知っていて気にかけてくれる人がたくさんいるという感じは、いわば安心感と安全感の基本であり、大きな支えである。この安心感の下に子どもたちはのびのびと自己を発揮し、外に向かって自己を成長させていくのだろうが、現代の子どもたちは、自分を取り巻く家族や友人、近隣の人々などを、こうした身近な存在としてどのくらい感じているのだろうか。

子どもたちの周囲にいる人々と子どもとの心理的距離をみるために、「あなたがケガをして入院したら、どのくらい心配してくれるか」という質問をしてみたのが**表4**で、「とても心配してくれる」と答えた者の割合の高い順に並べたものである。その1位にきているのは、やはり母親である。82%が「とても心配してくれるだろう」と答えている。2位は祖父母で75%、父親は3位で67%と、4位以下を大きく引き離している。この3者は、子どもにとって信頼し、安心して寄りかかることのできる人々という意味で、文字どおり「身内」なのだろう。

次に子どもにとって身近な人々は、一番仲よしの友だち、親戚のおじ・おば、担任の先生、きょうだい、いとこである。きょうだいの位置が7番目と低いことが気になるが、このグループは、子どもにとっては身内の次に身近な存在であるという意味で、いわば「準身内」と名づけてよさそうだ。

8位のいとこと大きく数値に差をつけて、養護教諭、校長先生、近所の人たち等がみられる。しかし、これらの人々に対しても、

「まあまあ心配してくれる」までを入れると、5割以上の子どもたちが親しい人々という感覚を持っている。子どもたちの環境は、程度の差こそあれ、結構あたたかい人々によって占められているようである。

では、これらの人々と子どもたちは、実際にどのような関係を保っているのだろうか。

表4 「あなたがケガをして入院したら、みんなはどのくらい心配してくれるか」

(%)

		とても心配	まあまあ心配	あまり心配しない	ぜんぜん心配しない	(いない)
身内	① 母親	82.1	14.4	2.1	0.6	0.8
	② 祖父母	75.0	16.2	2.1	1.1	5.6
	③ 父親	66.8	24.5	3.8	1.3	3.6
準身内	④ 一番仲よしの友だち	57.7	33.4	5.6	2.5	0.8
	⑤ 親戚のおじ・おば	44.9	41.9	8.8	2.4	2.0
	⑥ 担任の先生	43.4	39.8	11.8	5.0	−
	⑦ きょうだい	40.9	36.0	12.3	5.9	4.9
	⑧ いとこ	40.6	42.3	11.4	3.7	2.0
親しい他人	⑨ 養護教諭	28.1	47.4	17.4	7.1	−
	⑩ 校長先生	26.1	39.0	22.1	12.8	−
	⑪ 近所の人たち	21.5	46.5	21.0	9.2	1.8
	⑫ 塾や習い事の先生	19.4	35.1	17.7	9.6	18.2
	⑬ クラスのみんな	18.7	44.9	27.8	8.6	−
	⑭ 友だちの父や母	14.4	38.5	31.7	13.7	1.7

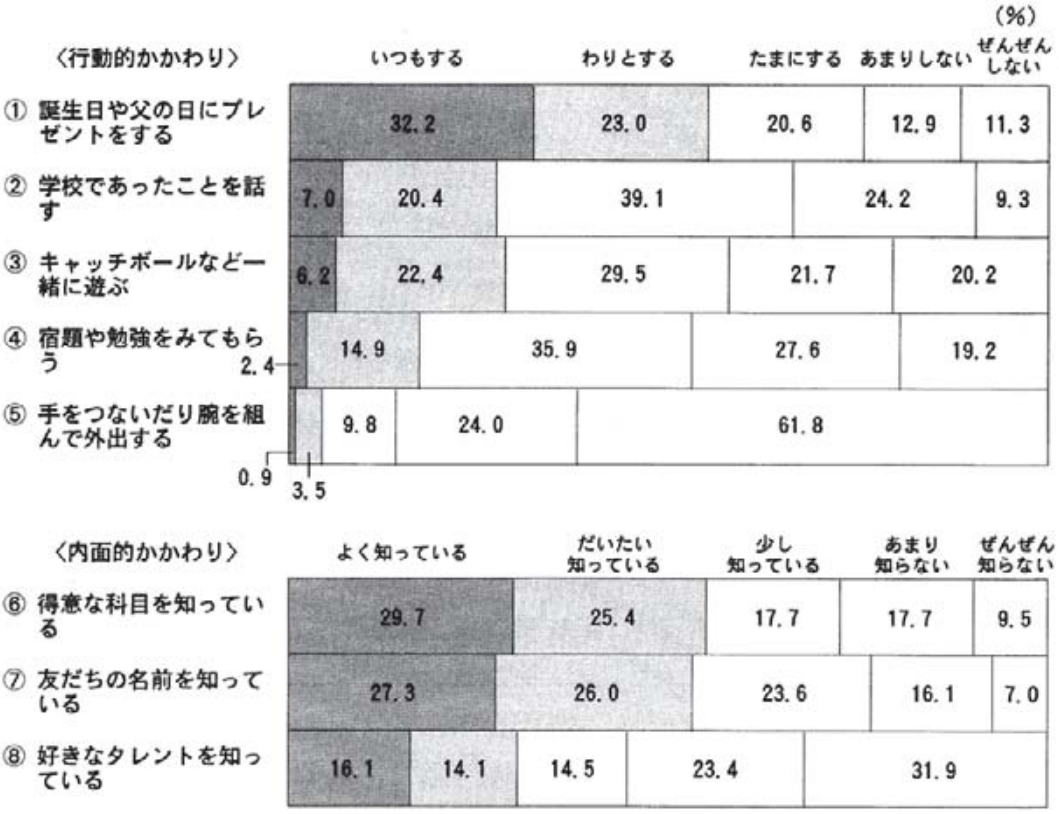
3 家族の中で

●父親とのかかわり)))

まず、父親とのかかわり方を、具体的な項目でみていこう（図4）。「誕生日や父の日にプレゼントをする」「学校であったことを話す」などの、いわば「行動的なレベル」でのかかわりの項目と、「得意な科目を知っている」から「好きなタレントを知っている」までの、自分のことを知ってくれているという「内面的なレベル」でのかかわりの項目を取り上げてみた。

この結果をみると、父親とのかかわりは、行動的なレベルでは少なく、「誕生日や父の日にプレゼントをする」がやや高いのみである。しかし、父親が自分の「得意な科目を知っている」「友だちの名前を知っている」の項目では、「よく・だいたい知っている」を合わせると5割を超えている。父親と行動を共にすることは少ないけれど、自分のことを知ってくれているという信頼感は持てているようである。

図4　父親とのかかわり

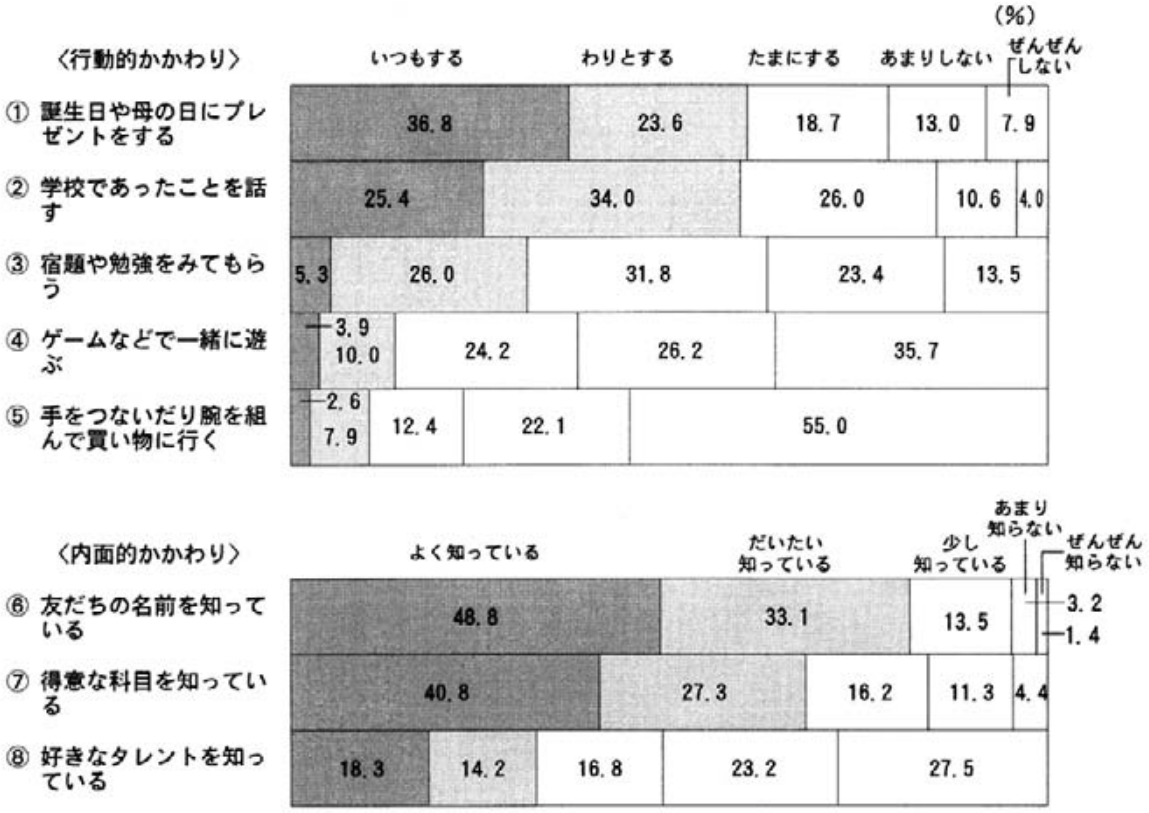

(%)
〈行動的かかわり〉
いつもする
わりとする
たまにする
あまりしない
ぜんぜんしない
① 誕生日や父の日にプレゼントをする
32.2
23.0
20.6
12.9
11.3
② 学校であったことを話す
7.0
20.4
39.1
24.2
9.3
③ キャッチボールなど一緒に遊ぶ
6.2
22.4
29.5
21.7
20.2
④ 宿題や勉強をみてもらう
2.4
14.9
35.9
27.6
19.2
⑤ 手をつないだり腕を組んで外出する
0.9
3.5
9.8
24.0
61.8
〈内面的かかわり〉
よく知っている
だいたい知っている
少し知っている
あまり知らない
ぜんぜん知らない
⑥ 得意な科目を知っている
29.7
25.4
17.7
17.7
9.5
⑦ 友だちの名前を知っている
27.3
26.0
23.6
16.1
7.0
⑧ 好きなタレントを知っている
16.1
14.1
14.5
23.4
31.9

●母親とのかかわり)))

一方、母親とのかかわりをみると（図５）、「誕生日や母の日にプレゼントをする」「学校であったことを話す」ことを「いつも・わりとする」を合わせると、６割に及ぶ。

また母親は、「友だちの名前を知っている」「得意な科目を知っている」の項目においても、７～８割の者が「よく・だいたい知っている」としている。母親は、話をしたり、宿題をみてもらうという一緒の行為も多く、また自分のことを知ってくれているとい

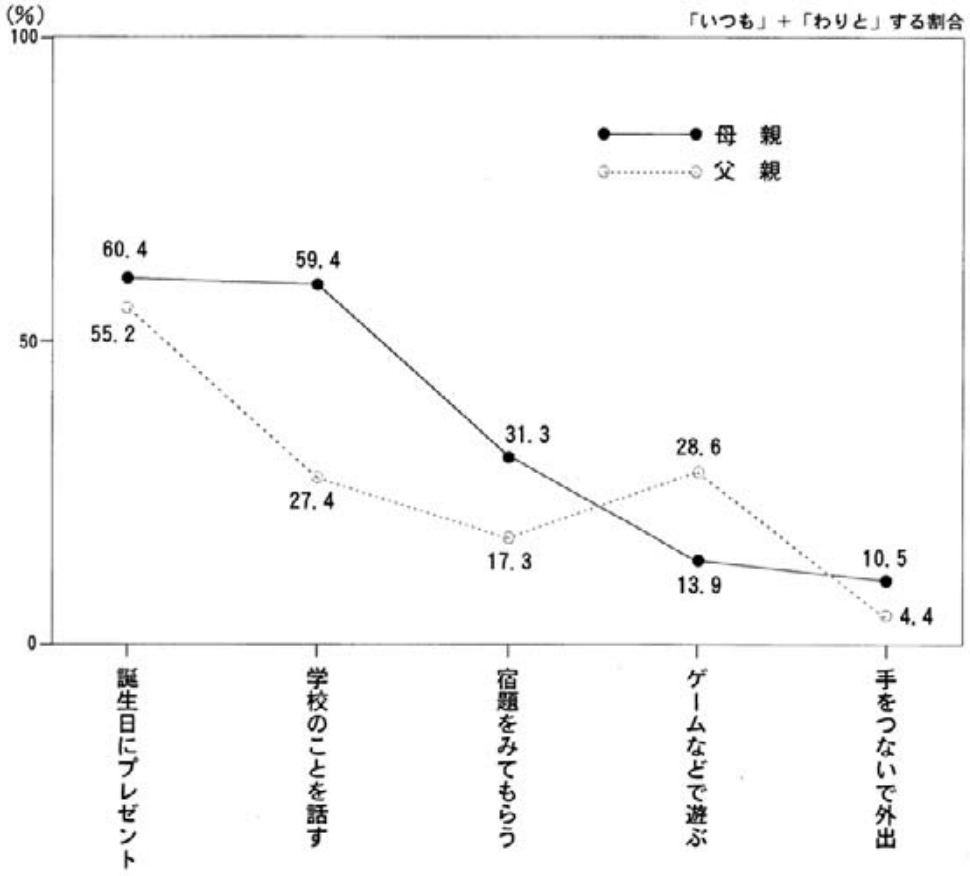
図５　母親とのかかわり



う信頼感も共に高くなっている。母親との一体感の強さがうかがえる。

また図6は、父親と母親とのかかわり方の違いを比較するためにグラフ化したものである。「学校のことを話す」という項目で母親が高く、父親とは大きな違いをみせている。子どもにとって大事な「学校」のことを話しているかどうかが、そのかかわりの近さを測る上での大きなポイントになるかもしれない。

図6　父親・母親とのかかわり

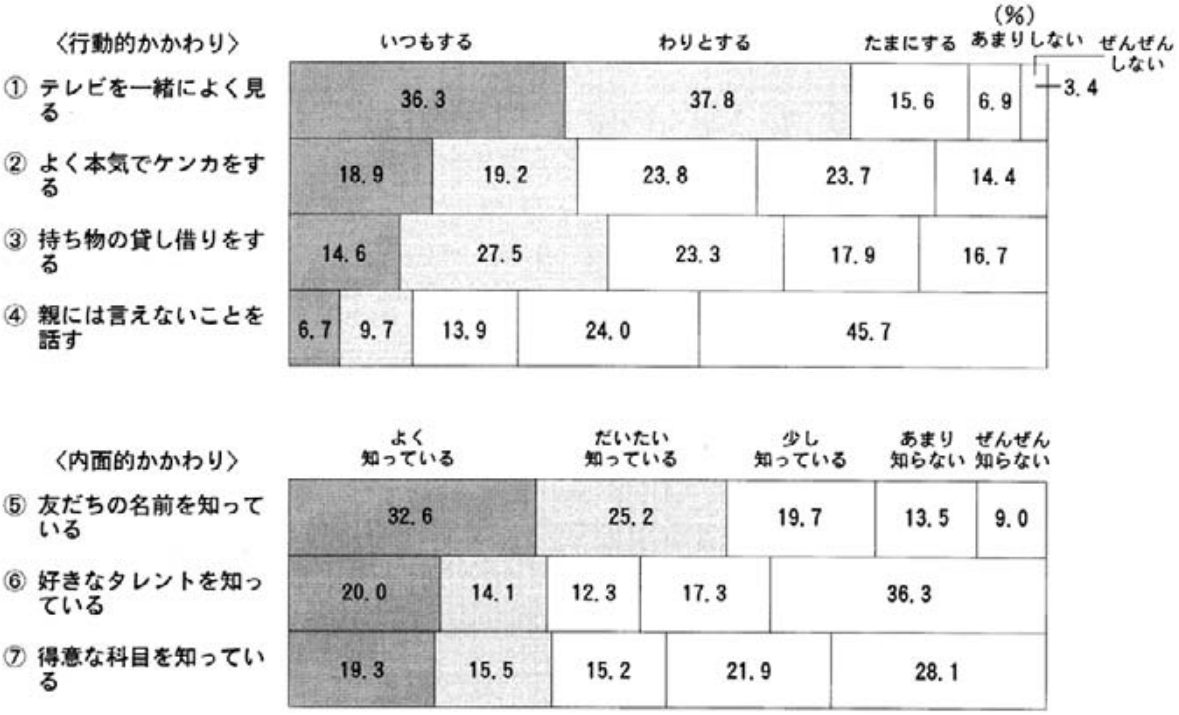


●きょうだいとのかかわり)))

きょうだいとのかかわりを図7に示した。図が示すように、「テレビを一緒によく見る」「友だちの名前を知ってくれている」ものの、その他の項目では予想より低い数値にとどまっている。「ケンカをする」こともあまりみられず、「親には言えないことを話す」存在でもなくなっている。

きょうだいとの年齢差が大きかったり、性が異なる場合には、当然数値が低くなることもあろう。しかし最近は、少子化や遊び場の減少などの影響で、近所に一緒に過ごせる友人が少なくなっている。親として、子どもにとってきょうだいが一番の遊び仲間であり、親以上に心を開く存在になるような子育て環境を作る工夫が必要になってきているのではなかろうか。

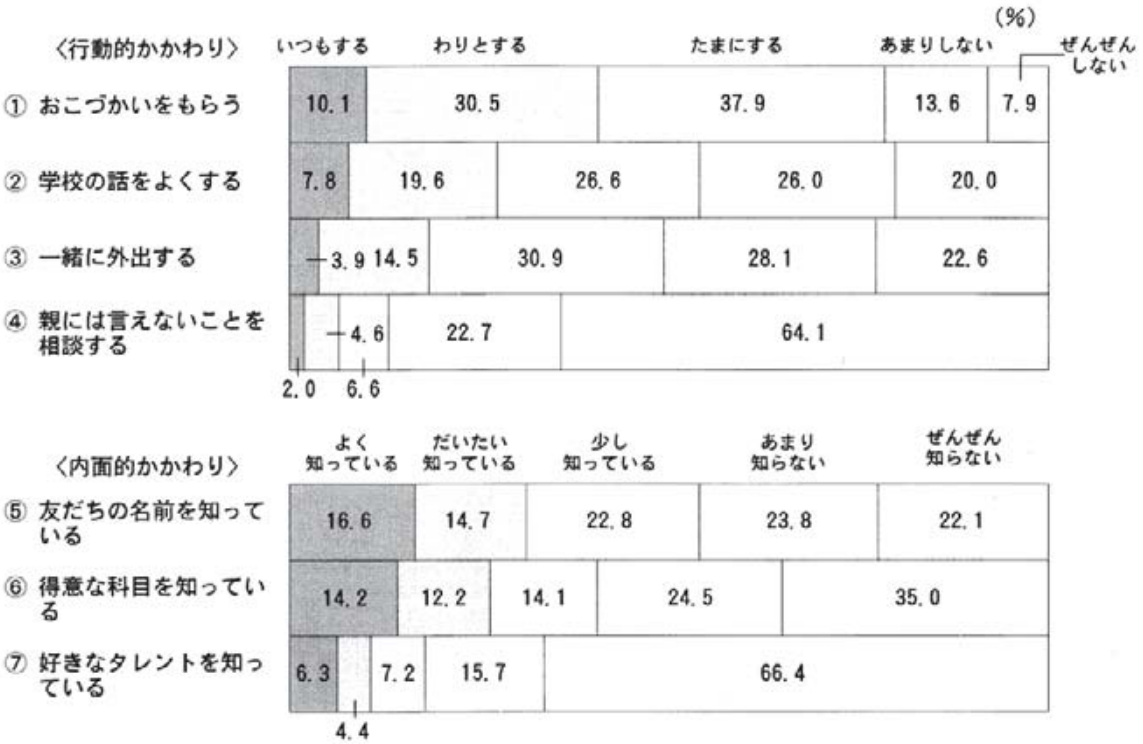
図7　きょうだいとのかかわり



●同居の祖父母とのかかわり)))

図8は、同居の祖父母とのかかわりについてみたものである。先の表4でみてきたように祖父母は、「ケガをして入院したら、とても心配してくれる」身近な存在であるが、具体的なかかわりの項目では、どれも低い数値にとどまっている。「おこづかいをもらう」

図8　同居の祖父母とのかかわり

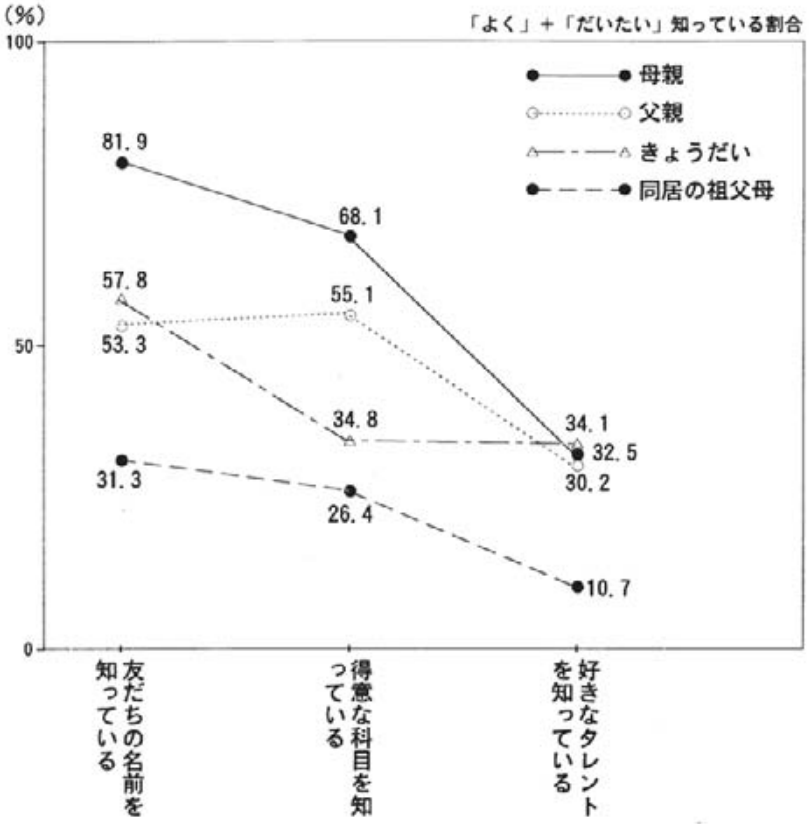


のがたまにある程度で、「学校の話をよくする」ことも、「一緒に外出する」こともあまりなく、「親には言えないことを相談する」存在でもない。自分のことを知ってくれているという信頼感も、あまりないようである。「ケガ」をしたときには心配してくれるという祖父母の心情はわかってはいても、日常的なかかわりは少ない。

「同居の中の孤独」という語があるそうだが、身近にはいても、祖父母と孫との心理的距離の大きさが感じられる結果である。

以上のデータをもとに、家族の人々との内面的なかかわりを比較してみたものが図9である。ここでも、家庭の中での母親への信頼感、一体感の強さと、逆に祖父母のそれの低さが読み取れる。

図9　父親・母親・きょうだい・同居の祖父母とのかかわり



●家族のまとまり)))

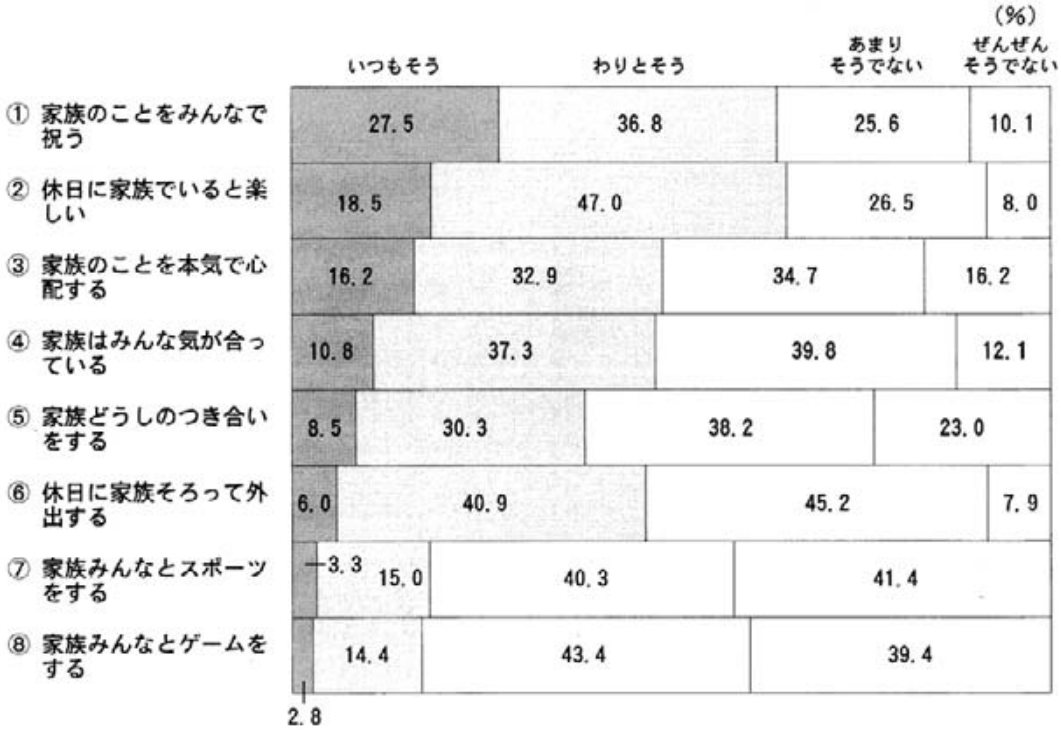
以上、家族一人一人について、子どもとのかかわりをみてきたが、次に家族全体のまとまりについてみていきたい。自分の家族を子どもはどうとらえているのだろうか。

図10は、「家族のことをみんなで祝う」から「家族みんなとゲームをする」までの項目で、家族のまとまりについて尋ねたものである。「家族のことをみんなで祝う」「休日に家族でいると楽しい」の2項目は、「いつも・わりとそう」と答えた者が6割を超える。その他の項目では、「あまりそうでない」という者の数値が高くなっている。

「家族のことを本気で心配する」や、「家族はみんな気が合っている」という家族の一体感を約半数の者が持ててはいるものの、「あまり・ぜんぜんそうでない」と否定する者も半数みられる。

家族のまとまりや一体感は、非常に強いというほどの結果でもないようだ。無論いつも一緒にいて寄りかかり合った関係というものが、いつでも一番望ましいわけではないであろう。しかしこの結果が、子どもたちが家族という単位から離れ、自立を始めようとしている姿ととらえるか、家族の中にまとまりのない傾向が生まれているのかは、判断のむずかしいところだろう。

図10　家族のまとまり



4 家族の外で

●親戚とのかかわり)))

次に親戚とのかかわりについてみていきたい。図11～図13は、父親や母親のきょうだい数や、いとこの数を尋ねたものであるが、父親のきょうだい数を知らない者が25%、母親のきょうだい数を知らない者が20%いる。いとこの数を知らない者は39%に達している。小学6年生という調査対象の年齢を考慮すると多すぎる数値と言わざるを得ない。父親や母親たちは、自分の子どもの頃のことや、きょうだいのことについて、わが子に話さないのだろうか。

図14は、親戚の数について尋ねたものである。自分の親戚の数を知らない者も64%に達している。

図15は、具体的な親戚づき合いについて尋ねたものである。「父親や母親が電話で親戚と話す」のが「よく・わりとある」者が67%いるが、「祝い事で集まる」のは「あまりない」者が一番多くなっている。また、「親戚どうしで旅行や遊びに行く」ことも、「親戚が泊まりに来る」ことや、「平日におじ・おばが遊びや用事で来る」こともあまりないようである。父親や母親のきょうだいについても、あまりよく知らないことも考えると、昔と比べて大方の家では、親戚づき合いが疎遠になってきている様子がみてとれる。

図11　父親のきょうだい数

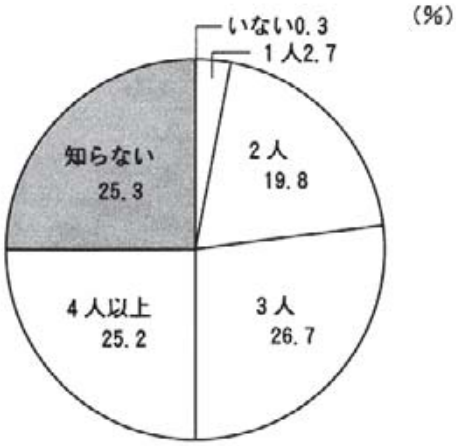


図12　母親のきょうだい数

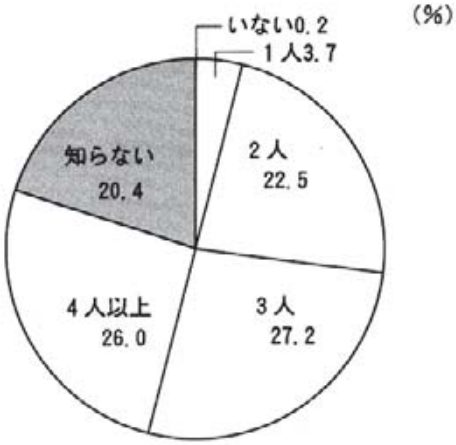


図13　いとこの数

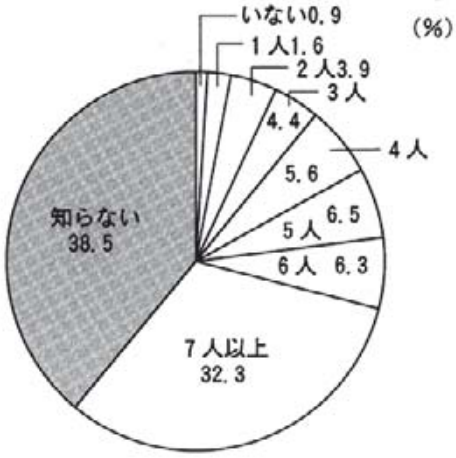


図14　親戚数

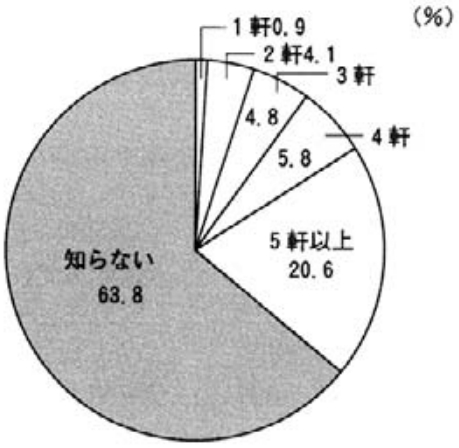
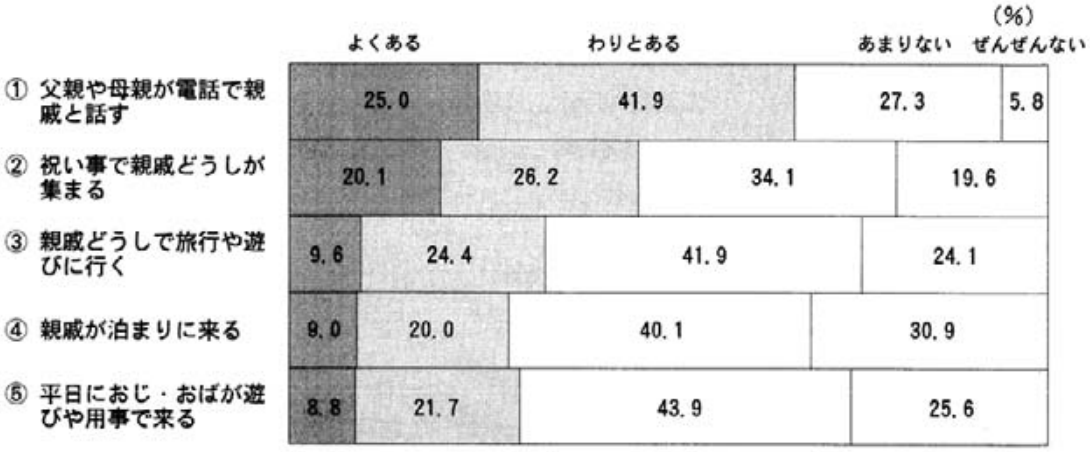


図15　親戚づき合いについて



●近隣の人々とのかかわり)))

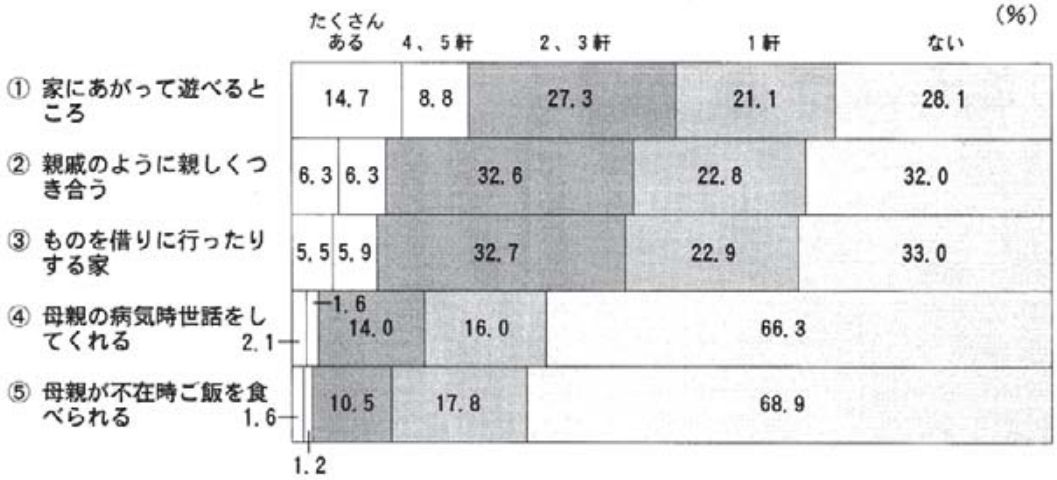
親たちと近隣の人々とのかかわりの様子は子どもの目からみて、どうなっているのであろうか（図16）。

「家にあがって遊べる家」や「親戚のように親しくつき合っている家」「ものを借りに行ったりしている近所の家」は、7割の者があるにはあるが、せいぜい1軒から2～3軒のようである。

これに比べて次の2項目、「母親が病気で寝ていたら世話をしにきてくれる」「母親が不在時にご飯を食べさせてくれる」という項目は、前の互いに助け合う関係よりいっそう深いつき合いをしている家である。昔はこうした家が近所にたくさんあり、子どもたちは時にはご飯を食べさせてもらうなど、互いの家を自分の家のようにして、育っていった。しかし今回の調査では、こうした深いつき合いの家が「1軒もない」という者が7割近くにのぼっている。

これからみられるように、近隣とのつき合いもまた浅いものになってきているが、母親が病気やどこかに出かけて家を留守にするという出来事は、日常少なからず起こり得ることであろう。前章で、子どもたちは近隣の人々に対しても、自分のことを気にかけてくれる人という感覚を持っていることをみてきたが、子どもたちの信頼感が失われていないにもかかわらず、われわれおとなの方が、他人の子どもに対して、あたたかさを忘れてしまったと言えるのではなかろうか。

図16　近隣の人々とのかかわり



●友人とのかかわり)))

次に、子どもたちの友人関係をみていきたい。**表5**は、クラスでの仲のよい友人数を尋ねたものであるが、ほとんどが同性に限定され、男子は男子の友人が8.4人、女子は女子の友人が7.1人となっている。

図17は、友人を含む他人とのコミュニケーションの様子を尋ねたものである。「仲よしの友だちに電話をかける」は、「何回もある」のが73%と高くなっているが、「手紙を出す」など、その他の項目では、予想されたほど高い数値とはなっていない。とりわけ友人と電話でのコミュニケーションが盛んな様子が見いだされる。

表6は、友人関係をみたものである。「友だちの相談にのるのが好き」「家族より友だちといる方が楽しい」の2項目には、「とても・わりと・少しそう思う」を合わせると、8割から7割の者がそう答えている。

しかし、そのつき合い方は、「友だちにイヤと言えない」(65%)、「リーダーにはさからわない」(40%)など、なるべく対立やトラブルを避けようとする傾向もみられるようである。また、「悩みを友だちには話さない」など、浅い関係が印象的である。

表5　クラスの仲よしの友人数

(平均人数)

	男子友人	女子友人
男　子	8.41	1.39
女　子	2.24	7.13

図17　他人とのコミュニケーション

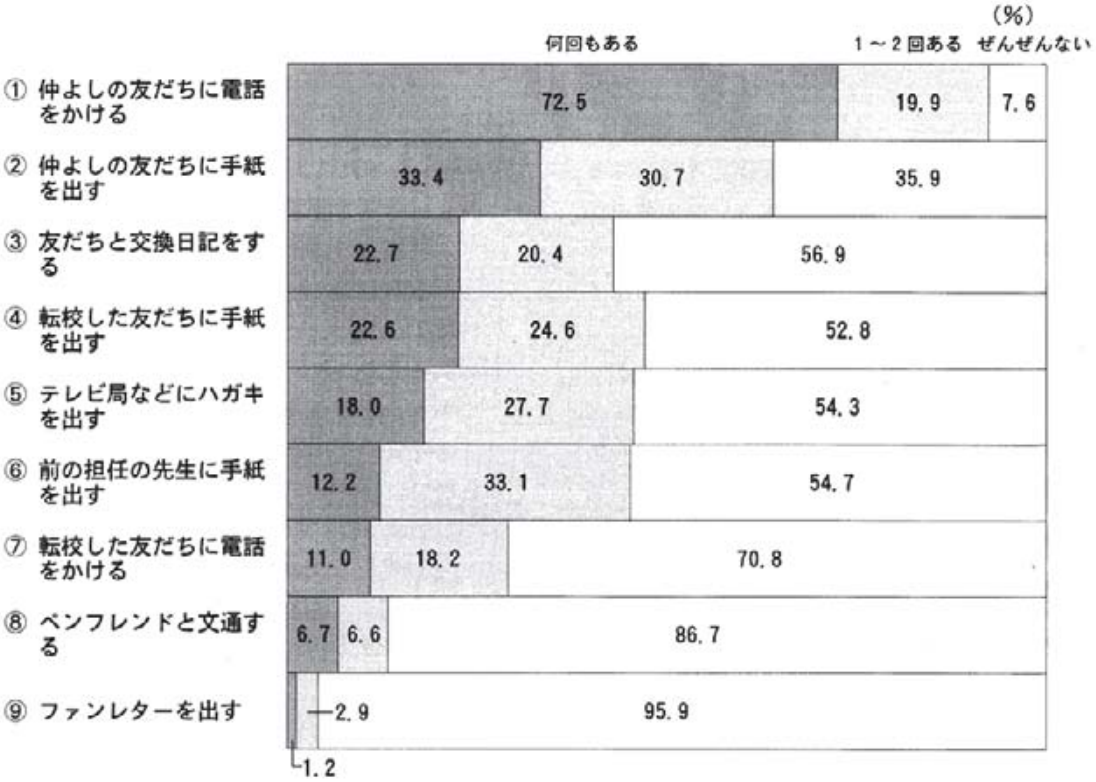


表6　友人関係

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
① 友だちの相談にのるのが好き	21.2	(32.6)	30.1	11.7	4.4
② 家族より友だちといる方が楽しい	18.8	18.3	(30.2)	24.3	8.4
③ 友だちにイヤと言えない	14.3	23.9	(27.2)	22.2	12.4
④ リーダーにはさからわない	9.4	12.5	17.6	27.6	(32.9)
⑤ 大勢の友だちより2～3人でいい	14.5	23.2	19.6	(25.1)	17.6
⑥ 悩みを友だちには話さない	14.4	23.1	(25.3)	23.6	13.6
⑦ 友だちよりマンガの方が好き	4.3	6.1	9.5	31.2	(48.9)

(　)は最大値（以下同）

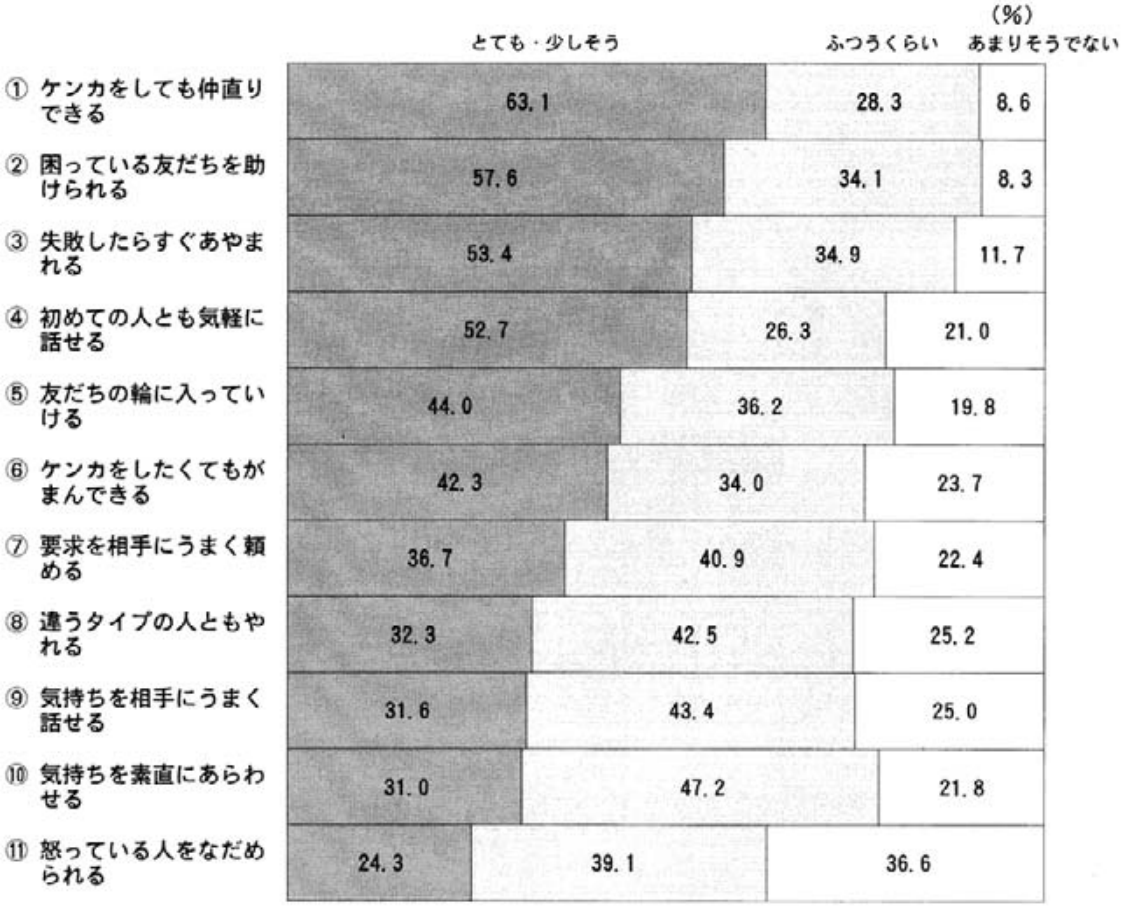
5 子どもの住む心理的な世界

●人間関係を作り出す力をめぐって)))

以上、子どもたちとさまざまな人々とのかかわりをみてきた。いうまでもないことだが人間関係は決して与えられるだけのものではなく、自分から積極的に築いていくべきものである。この「人間関係を作り出す力」について、子どもたちはどのように自己評価しているのだろうか。

図18は、こうした観点から、人間関係を作り出し維持していく場合に必要となるであろう内容についてみたものである。図が示すように、「ケンカをしても仲直りできる」「困っている友だちを助けられる」から「ケンカをしたくてもがまんできる」までの項目で、「とても・少しそう」と答える者が6割から4割いる。また、「違うタイプの人ともやれる」から「気持ちを素直にあらわせる」までの項目でも、自分は「ふつうくらい」であると答えている。子どもたちは、人間関係を作っていくことに対しては、割合に不便を感じておらず、自信を持っているようだが、実際はどうなのだろうか。

図18　人間関係を築く力

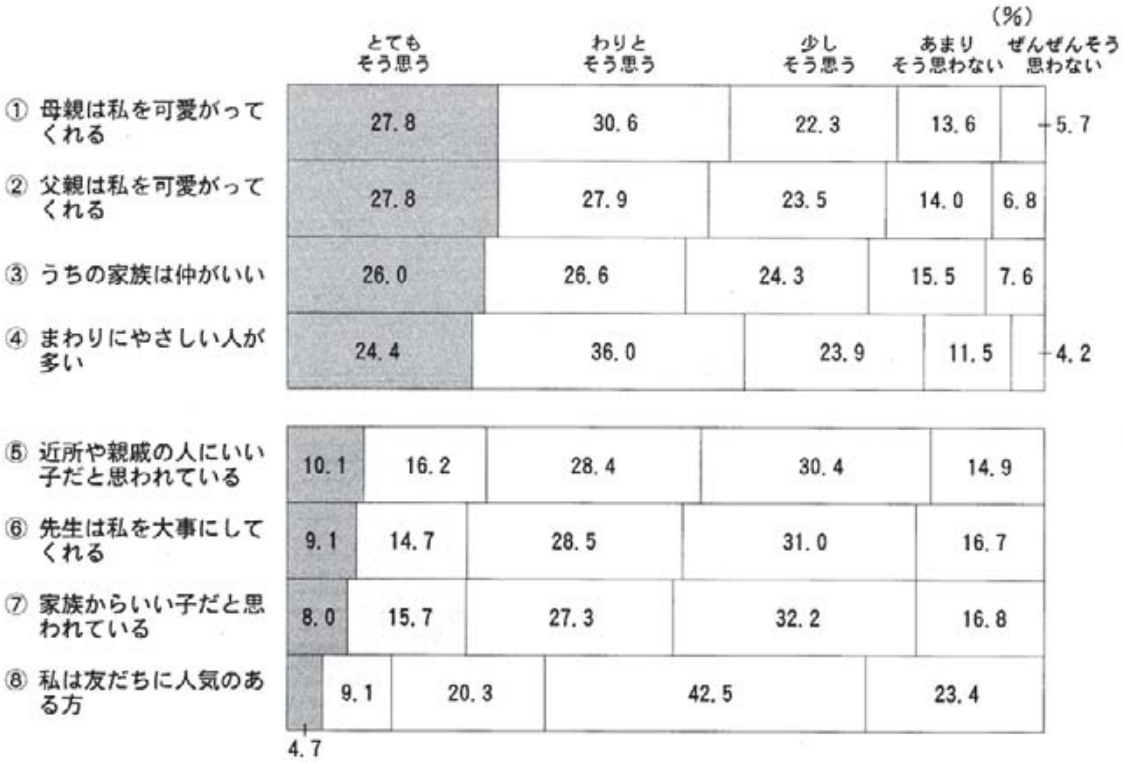


●子どもたちのとらえている人間的環境)))

最後に子どもたちの自己像から、その住む世界のあたたかさを探ってみよう。図19は、自分の周囲の人間関係をあたたかくとらえているかどうかをみようとしたものである。①から④までの項目の数値にみられるように、子どもたちは、母親や父親から可愛がってもらい、自分の周囲にもやさしい人が多いと感じており、家庭的には結構あたたかい環境の中に暮らしていることがわかる。

しかし、家庭の外の状況は少し違う。親戚や近所の人、先生などからの評価に関する項目においては、すべての項目で「あまりそう思わない」と答えている。両親などに可愛がってもらえてはいるものの、自分の周囲にいる他人からの評価には、やや自信のない子どもたちの姿が浮かび上がってくる。

図19　周囲との関係



また、自分は「明るく」「じょうぶ」であり、少し「スポーツが得意」であるものの、「気持ちがやさしく」「勉強がよくでき」「スタイルがいい」ということはないと、ここでもやや自信のなさを表明している（**表7**）。

関連して、子どもたちの幸せ感を尋ねたものが、**図20**である。一番幸せなのは、「友だちと遊んでいるとき」であり、次に「家族と一緒にいるとき」「1人でマンガやテレビを見ているとき」という順である。そこには家族から自立して、友人の方へ向かおうとしている6年生という年齢を感じさせる姿がみられる。

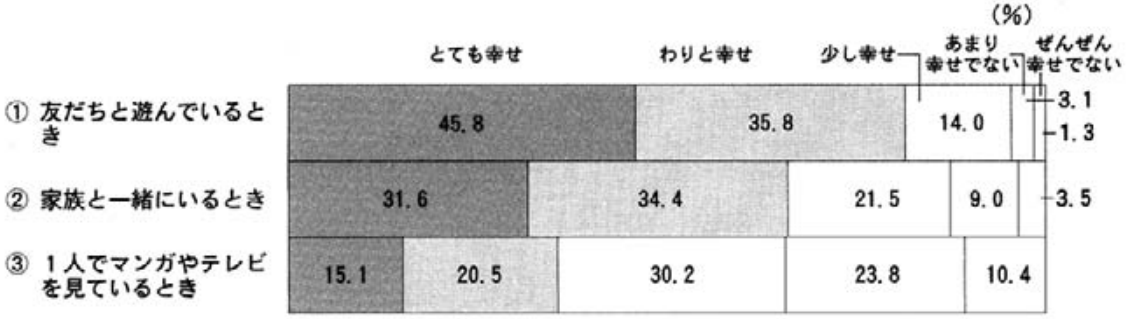
表7　どんなタイプの子どもか

（%）

	とてもそう	少しそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない
① 明るい	38.9	39.1	16.6	5.4
② じょうぶ	38.6	31.4	22.3	7.7
③ スポーツが得意	23.5	29.6	29.2	17.7
④ がんばりや	17.5	37.5	33.7	11.3
⑤ 気持ちがやさしい	16.6	33.3	36.1	14.0
⑥ 勉強がよくできる	10.0	28.5	40.1	21.4
⑦ スタイルがいい	8.2	13.5	36.2	42.1

（　　）は最大値とその近似値
（　）は最大値

図20　幸せ感

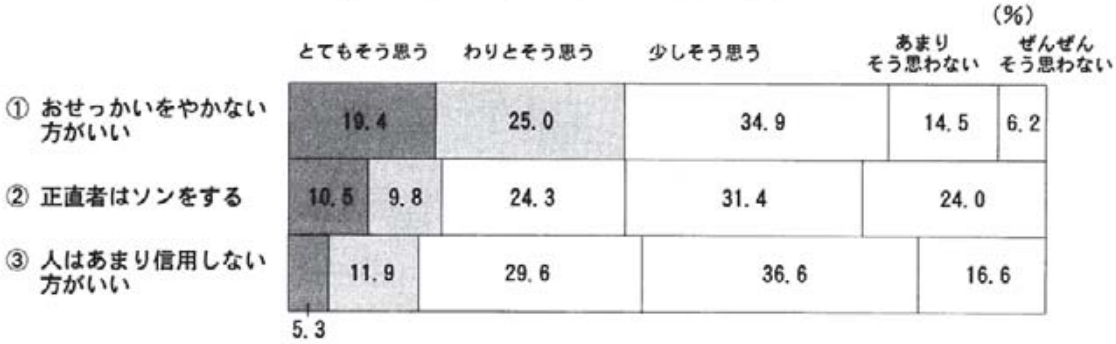


●子どもたちの人間観)))

人間観にかかわると思われる３つの項目について、子どもたちの考えを尋ねてみたのが**図21**である。

幸いにも、「正直者はソンをする」とも思っていないし、「人はあまり信用しない方がいい」とも思っていない。人間への信頼感は失っていないとみてよさそうだ。しかし「他人がおせっかいをやかない方がいい」とも思っており、信頼はしていてもあまり深くかかわらない方がいいという、やや消極的で自己防衛的な態度が気がかりだ。傷つくことを恐れている子どもたちの姿なのかもしれない。

図21　次のような考えをどう思うか



6 地域差について

これまで単純集計をもとに、子どもたちの人間関係の様相をみてきたが、全国に調査地域を散らしたこともあって、地域による差を検討してみよう。

本調査は全国35校にわたっており、子どもたちの人間関係やつき合い方には地域差が予想されていた。しかし、学区の特徴としてあげてもらった「古くからの住宅地・新興住宅地・農業地域」の区分では、あまり顕著な地域差は見いだされていなかった。

表8のように、同居の祖父母に、「おこづかいをもらう」ことが多少多いのが新興住宅地であり、「学校の話をよくする」のが、やや農業地域に多いという結果ぐらいである。前章で、母親と学校の話をすることが、かかわりの強さを示すポイントの1つでありそうだと指摘したが、この農業地域の数値をみると、やはり他の地域よりは祖父母とのかかわりに強いものがあるのかもしれない。祖父母と学校の話をする割合がやや多く、農業地域では祖父母がそれほど家族から疎外されていないことがみてとれる。

親戚とのかかわりでは、**表9**のように、昔からの住人が住んでいる住宅地に、親戚づき合いがやや多いという結果がみられる。

表8　同居の祖父母とのかかわり × 地域

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	農業地域
① おこづかいをもらう	39.2	46.5	37.8
② 学校の話をよくする	27.5	25.5	30.1
③ 一緒に外出する	19.2	20.4	16.6
④ 親には言えないことを相談する	6.9	6.5	6.1
⑤ 友だちの名前を知っている	31.9	30.8	32.4
⑥ 得意な科目を知っている	25.0	29.3	25.4
⑦ 好きなタレントを知っている	8.1	12.9	10.0

①～④は「いつも」＋「わりと」する割合
⑤～⑦は「よく」＋「だいたい」知っている割合
◯は最大値
◯は最大値ではあるが、その差の低いもの（以下同）

表9　親戚とのかかわり × 地域

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	農業地域
① 父親や母親が電話で親戚と話す	66.4	68.9	66.4
② 祝い事で親戚どうしが集まる	48.5	44.8	47.3
③ 親戚どうしで旅行や遊びに行く	37.3	31.7	34.5
④ 親戚が泊まりに来る	32.3	25.9	32.4
⑤ 平日におじ・おばが遊びや用事で来る	34.1	27.6	33.5

「よく」＋「わりと」ある割合

しかし一方、近隣の人々とのかかわりでは（**表10**）、「母親が不在時にご飯を食べられる家」や「母親が病気時に世話をしてくれる家」「家にあがって遊べる家」が１軒もないと答えた者は、「古くからの住宅地」に多いという結果となっている。逆に「新興住宅地」にその数値が一番低く、近隣の人々とのかかわりでは、若い年代の両親が多く、同年齢の子どもたちも比較的多いであろう新興住宅地の方が、子どもにとってはあたたかいものとなっているのかもしれないことが示されている。

表10　近隣の人々とのかかわり × 地域

（%）

	古くからの住宅地	新興住宅地	農業地域
① 母親が不在時ご飯を食べられる	72.8	65.1	70.4
② 母親の病気時世話をしてくれる	68.6	63.1	66.9
③ ものを借りに行ったりする家	33.8	31.3	32.6
④ 親戚のように親しくつき合う	34.2	30.6	29.5
⑤ 家にあがって遊べるところ	30.9	26.0	27.4

１軒も「ない」割合
◯は最大値
◯は最大値ではあるが、その差の低いもの
―は最小値（以下同）

7 男子と女子の特徴

時代は変わっても、男の子は強くたくましくあってほしい、女の子は思いやりや、やさしさを身につけてほしいなど、親が男子・女子に期待するものは多少とも異なるように思える。また、男子・女子それぞれが、もって生まれた性格や傾向の差もある程度あるかもしれない。こうしたことから、男子・女子では親やきょうだい、友人などの人間関係の持ち方に特徴があるのだろうか。調査データからみていこう。

●親との関係)))

表11以下の表は、5段階評価のうち肯定的な回答の2段階の合計を表したものである。たとえば、「いつもする・わりとする・たまにする・あまりしない・ぜんぜんしない」のうち、「いつもする」と「わりとする」の2段階のみを抽出した。

父親とのかかわりでは、表11のとおりである。男子の方が、父親と「キャッチボールなど一緒に遊び」、「得意な科目」「友だちの名前」や「好きなタレント」を知っているなど、行動レベルでも内的なレベルでも、父親とのかかわりが深いことがわかる。他方、女子も父親とのかかわりが少ないわけではないが、内的レベルより、「誕生日や父の日にプレゼントをする」「学校であったことを話す」「宿題や勉強をみてもらう」などの行動レベルで、男子よりも多く父親とかかわっていることがわかる。

表11　父親とのかかわり × 性

(%)

	男　子	女　子
① 誕生日や父の日にプレゼントをする	44.5	66.4
② 学校であったことを話す	22.1	33.7
③ キャッチボールなど一緒に遊ぶ	37.6	18.4
④ 宿題や勉強をみてもらう	15.5	19.1
⑤ 手をつないだり腕を組んで外出する	2.7	6.2
⑥ 得意な科目を知っている	58.4	51.2
⑦ 友だちの名前を知っている	55.9	49.9
⑧ 好きなタレントを知っている	37.7	21.6

①～⑤は「いつも」＋「わりと」する割合
⑥～⑧は「よく」＋「だいたい」知っている割合

母親とのかかわりは**表12**のとおりである。「誕生日や母の日にプレゼントをする」「学校であったことを話す」「宿題や勉強をみてもらう」「ゲームなどで一緒に遊ぶ」などの面で、女子と母親とのかかわりが濃い。女子に比べると男子はそれほど母親とかかわっていない。男子・女子とも、同性の親とのかかわりが比較的多く、一種の連帯感のようなものがみられる。しかし、一般的には女子の方が男子よりも、親とのかかわりが多いことが目立つ。

表12　母親とのかかわり × 性

(%)

	男　子	女　子
① 誕生日や母の日にプレゼントをする	46.9	74.5
② 学校であったことを話す	46.5	73.9
③ 宿題や勉強をみてもらう	26.6	36.3
④ ゲームなどで一緒に遊ぶ	11.0	16.6
⑤ 手をつないだり腕を組んで買い物に行く	3.3	18.1
⑥ 友だちの名前を知っている	78.6	85.5
⑦ 得意な科目を知っている	67.9	68.4
⑧ 好きなタレントを知っている	34.9	29.3

①～⑤は「いつも」＋「わりと」する割合
⑥～⑧は「よく」＋「だいたい」知っている割合

●きょうだいや家族との関係)))

きょうだい間のかかわりは、表13からわかるように、女子の方がきょうだいと「テレビを一緒によく見る」「よく本気でケンカをする」「持ち物の貸し借りをする」「親には言えないことを話す」「友だちの名前を知っている」と答えた者が多い。行動的にも内的にも、

表13　きょうだいとのかかわり × 性

(%)

	男子	女子
① テレビを一緒によく見る	70.6	78.3
② よく本気でケンカをする	35.5	40.4
③ 持ち物の貸し借りをする	34.3	50.5
④ 親には言えないことを話す	15.2	18.1
⑤ 友だちの名前を知っている	55.8	60.2
⑥ 好きなタレントを知っている	34.5	34.0
⑦ 得意な科目を知っている	34.6	35.1

①～④は「いつも」＋「わりと」する割合
⑤～⑦は「よく」＋「だいたい」知っている割合

男子に比べると女子の方がきょうだいと多くかかわっていることがわかる。

では、そうした個別の関係ではなく、それらを含めた家族全体のかかわり合いの様子について、女子と男子で比べてみよう。**表14**にみられるように、「家族のことをみんなで祝う」「休日に家族でいると楽しい」「家族のことを本気で心配する」「家族はみんな気が合っている」「家族どうしのつき合いをする」など、ここでも女子の方が家族とのかかわり合いを強く感じている。家族全体のきずなやまとまりといったものを、女子の方が大切に感じているようだ。

表14　家族のまとまり × 性

(%)

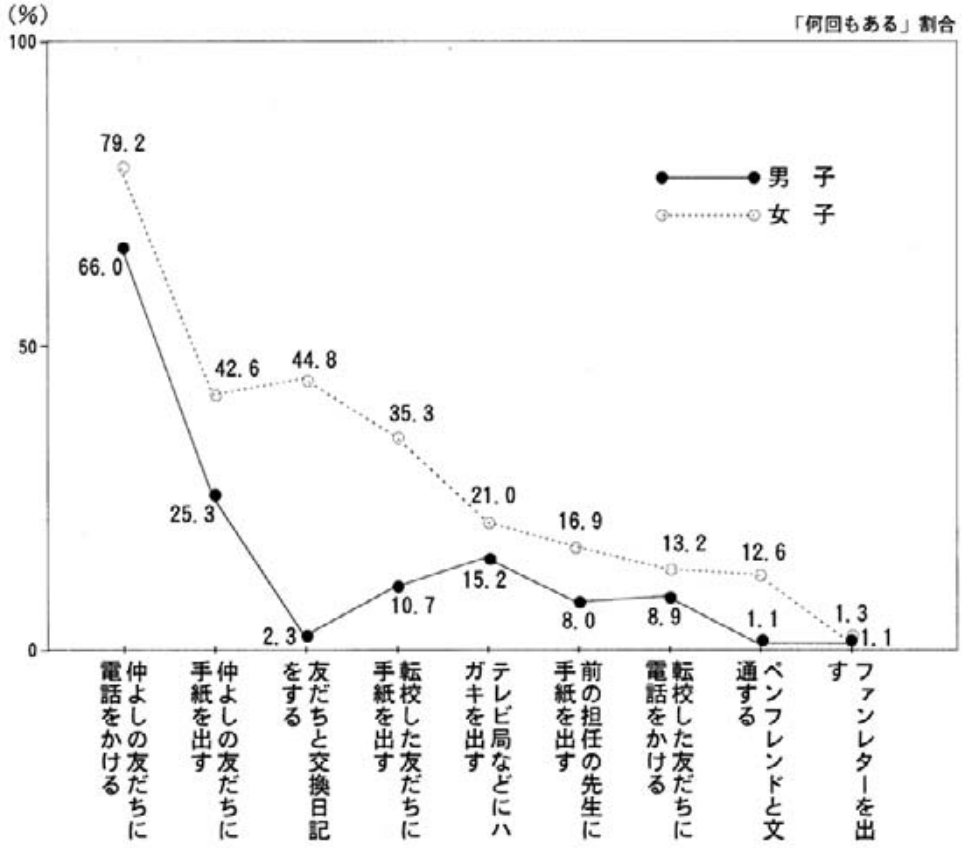
	男　子	女　子
① 家族のことをみんなで祝う	60.4	(68.5)
② 休日に家族でいると楽しい	61.5	(69.5)
③ 家族のことを本気で心配する	44.8	(52.8)
④ 家族はみんな気が合っている	45.2	(50.6)
⑤ 家族どうしのつき合いをする	36.0	(41.4)
⑥ 休日に家族そろって外出する	(47.7)	45.4
⑦ 家族みんなとスポーツをする	18.1	18.1
⑧ 家族みんなとゲームをする	15.1	(18.2)

「いつも」＋「わりと」そうの割合

●友人との関係)))

では友人との関係に目を向けてみよう。今の子どもたちは、友人を含めた他人と直接面と向かって話すばかりでなく、電話や手紙による間接的なやりとりや、交換日記、ペンフレンドをつくる、ファンレターを出すなど、さまざまな形で人とかかわりを持っている。ここでも**図22**にみられるように、圧倒的に女子の方が「仲よしの友だちや昔の友だちに電話をしたり、手紙を書く」「交換日記をする」「テレビ局にハガキを出す」ことや、「ペンフレンドと文通する」頻度が高いことがわかる。特に手紙や日記など、文字によって友人とかかわろうとするのは、女子の特徴かもしれない。

図22　友人とのかかわり × 性



●人間関係の性差)))

これまでみてきたように、全般的に女子の方が、家庭の内外を問わず人と人とのかかわり合いに積極的である。ということは、女子に比べて男子は人間関係が不得手なのだろうか。

表15をみると、必ずしもそうではない。男子は「友だちの輪に入っていける」「ケンカをしたくてもがまんできる」「要求を相手にうまく頼める」「怒っている人をなだめられる」ことなどを得意としており、友だち集団に入ってうまくやっていく能力は、決して女子にひけをとらない。**表16**では、男子の方が「家族より友だちといる方が楽しい」、つまり家庭外に目を向け、「大勢の友だちより2～3人でいい」と、友人の量よりも質を選んでいる。また困ったときに、「悩みを友だちに話す」よりも、自分でどうにか問題を解決しようとする自主的な姿もうかがえる。このあた

表15　人間関係の上手さ × 性

(%)

	男　子	女　子
① ケンカをしても仲直りできる	63.0	63.8
② 初めての人とも気軽に話せる	53.0	52.8
③ 失敗したらすぐあやまれる	53.1	54.5
④ 困っている友だちを助けられる	54.5	60.5
⑤ 友だちの輪に入っていける	49.6	38.9
⑥ ケンカをしたくてもがまんできる	44.3	40.1
⑦ 違うタイプの人ともやれる	32.1	32.6
⑧ 要求を相手にうまく頼める	38.6	33.7
⑨ 気持ちを相手にうまく話せる	30.5	32.8
⑩ 怒っている人をなだめられる	26.2	22.4
⑪ 気持ちを素直にあらわせる	30.8	30.4

「とても」＋「少し」そうの割合

りに女子とは別の男子らしい人間関係の持ち方がみえてくる。家族や友人との親しい関係を保とうとするよりは、周囲の人から一歩距離をおき、ひとりの人間として独立しようとする姿とでも表現できるだろうか。

これに対して女子は、家族や友人とも幅の広い人間関係を保ち、手紙、日記、電話などさまざまなコミュニケーション手段を活用することに特徴がある。また、表16から「友だちにイヤと言えない」「リーダーにはさからわない」などの項目で数値が高く、人間相互の関係性を重視し、集団の中で目立たずうまくやっていこうとする傾向がみられる。表16の①「友だちの相談にのるのが好き」であり、表15の④「困っている友だちを助けられる」など、やさしさや思いやりに満ちた対人関係が得意である。

これらの男子と女子にみられる特徴は、子どもに限らずおとなの世界にもみられる。女性は一般に自分が他人と結び合っているという感覚を大切にして、家族や友人など、親しい人たちとのつながりの中に、生きがいを発見する。それに比べると男性は独立心や自分と他人を切り離そうとする感覚が強く、他人に流されない自立した自我を持とうとする傾向をみることが多い。

しかし女性らしさ、男性らしさとは何だろう。以前であれば、女の子はやさしく思いやりを持った人に、男の子は強くたくましく独立心を持った人に、と明確に性格形成の目標を定めることができた。

しかしこれらは、どちらも好ましい性質である。そして最近では、これらの好ましい性質が相互乗り入れした状態、いわゆる「両性具有性（アンドロジニー）」という考え方が市民権を得はじめた。女性はやさしく包容力を持ってという従来の女性らしさに加えて、強さやたくましさも持ち合わせること。男性は独立心や理性を持つと同時に、しなやかな共感性や思いやりも持ち合わせる。そんな姿がこれからの時代に生きる子どもたちに求められるのであろう。

表16　友人との関係 × 性

（%）

	男　子	女　子
① 友だちの相談にのるのが好き	43.2	64.6
② 家族より友だちといる方が楽しい	38.7	35.1
③ 友だちにイヤと言えない	36.6	39.9
④ リーダーにはさからわない	20.4	23.6
⑤ 大勢の友だちより２～３人でいい	40.1	35.1
⑥ 悩みを友だちには話さない	42.7	32.1
⑦ 友だちよりマンガの方が好き	11.0	9.5

「とても」＋「わりと」そう思う割合